

また、この季節

SHATTER CONE



また、この季節

---

その夜。開け放していたベランダの窓から、一匹のクマ蝉が部屋に飛び込んできた。

「すみませんね。いつもうるさくて」

ジィワジィワと耳障りな声だったが、蝉は確かにそう言った。

私は、尤もだと思いながら苦笑した。

蝉はさらに言った。

「どうせあと七日ぐらいの命だから、大目に見て下さいよって、私が言うと思っているでしょ」  
凶星だったので少々驚いたが、

「別に」

と、私は無関心を装い、読みかけの本に目を戻した。

ジィワジィワジィワジィワ

ジィワジィワジィ...

「え？今、何て？」

「唄を一節」

ジィワジィワジィワジィワ

ジィワジィワジィ...

「やかましいですか？」

「全くね」

面倒そうな私の態度に、蝉はさらに声を上げ、早口で鳴き始めた。

「私は承知の上で鳴いているんですよ。みんなウルサイと思っているってね。でも私たちは鳴かないと意味が無いんです。どうせ儚い命なんだからと哀れんで欲しくは無いんです。むしろウルサイと思ってくれて良いんです。私が鳴いている事を、精一杯泣いている事を、気が付いてくれるだけで、ほんの少しでも気にしてくれるだけで、私は、私たちは、満足なんです。またこのクソ暑いのにあいつらが鳴いているんだなって、またこの季節が来たんだなって、また...ジィワジィワジィワジィ...

急に蝉の声が聞こえなくなったので、私は本を置き、覗き込んでみた。

蝉は脚を小さく縮めて、堅くなっていた。

私はプランターの隅に、7センチほどの物体となった彼を埋めた。

彼の死などお構いなしに、昨日と同じ夏の暑い一日が始まる。

そこかしこから聞こえてくる、存在証明の主張。

降るほどに鳴き枝垂れ、主張できる幸せ者の群れ。

また、この季節に。